

百人一首を書きましよう。

ひさかたの光のどけき春の日に

しづ心なく花の散るらむ

紀友則

誰をかも知る人にせむ高砂の

松も昔の友ならなくに

藤原興風

人はいさ心も知らずふるさとは

花ぞ昔の香に匂ひける

紀貫之

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを

雲のいづこに月宿るらむ

清原深養父

【現代語訳】

日の光がのどかな春の日に、  
どうして落ち着いた心もなく  
桜の花は散るのだろうか。

【現代語訳】

年老いた私はいったい誰を  
友にすれば良いのだろうか。  
あの高砂たかさごの松も昔からの  
友ではないのだから。

【現代語訳】

人の心はわかりませんが、  
昔なじみの里の梅の花の  
香りだけは変わっており  
ません。

【現代語訳】

夏の夜は短く、まだ宵と思っ  
ているうちに明けてしまっ  
たけれど、沈む暇もない月  
はあの雲のどこかに宿るの  
だろうか。